

# 年頭アピール

反原発・反リニア・組織強化・拡大のための闘いを、  
全組合員が一丸となって推し進めよう！

職場から当たり前の労働組合活動を展開し、  
全ての労働者の未来を、私たちが先頭に立って切り開こう！

本日、私たちJR東海労は、2012年旗開きを開催し、今私たちが立つ、混迷する時代認識の一致を図ると共に、現実を見据え、困難を打ち破るための向こう一年間の闘う方向性を参加者全体で確認した。

昨年、JR東海労は結成20年を迎えた。その区切りの年に相応しく、私たちは大きな目標であった組織拡大を実現した。2月に亀山明生さん、そして10月には、若き仲間を迎え入れることができた。全組合員が心の底から歓喜の声を上げ、勇者の雄叫びを職場の隅々まで轟かせたのだ。

私たちは、この20年間棘の道を闘い抜いてきた。一つの節目の年であると同時に、この間の闘いが、着実に前進し広がりをつくり共感を得ていることを、二人の加入により、一層確信することができた。朝日の前の雪だるま、一年で潰してみせる、と豪語した葛西敬之会長の思いとは裏腹に、私たちは、職場でしっかりと根を下ろし闘ってきた。JR東海労の運動の質は、全ての仲間たちから共感を得るまでに前進してきているのだ。あらためて、様々な困難に立ち向かい、自らの進むべき道を自らが切り開いてきた二人の勇気と闘いに学び、そして、決意を促し共に闘ってきた仲間たちの闘いに学び、更なる組織拡大を実現するために、全組合員が奮闘することを高らかに宣言する。

IC乗車券の不正使用、大麻所持などは、まさに「命令と服従」「規律と忠誠心」の労務管理が破綻したことを意味する事態である。締め付けと責任追及、懲罰では、疲弊した職場を生み出す以外なものでもないことがはっきりしたのだ。職場の主人公は働く者でなければならない。私たちは、職場の不満、声なき声に耳を傾け、理不尽と闘い、全ての労働者が、そして若者が生き活きと働ける職場を目指して断固闘うものである。

一方、闘いの前進に恐怖した、葛西敬之会長をはじめとした会社・経営陣は、その報復として役員の酒気帯びをデッチ上げた。東二運分会・斉藤厚志書記長は亀山明生さんが加入した直後に酒気帯びをデッチ上げられ、異例の早さとデタラメな手続きで減給処分を通告されたのである。まさに報復以外のなにものでもない。更に、ボーナスカット乱発でJR東海労組合員を職場から放逐する攻撃が熾烈にかけられている。私たちは、このように、なりふり構わず、熾烈にかけられる組織破壊攻撃を跳ね返すために断固闘う決意を明らかにする。

昨年3月11日、東日本大震災が発生した。私たちが嘗て経験したことのない規模による大地震・大津波と原発事故は世の中を一変してしまった。死者は1万5千名を超え、未だ行方不明者も3千4百名を超える事態となっている。東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故・放射能漏れ事故は、人類がこれまで経験したことのない危機的状況を生み出した。住むところを追われ、飲料水、食品、母乳までもが放射能で汚染されてしまった。子供たちの未来は奪われ、人間として生きていく全てのものが破壊される事態となってしまったのだ。

私たちは、このような事態を目の当たりに、労働組合として、一人の労働者としてどのように生きるのか、その真価が問われることとなった。「国難」、「国家」、「国民」イデオロギーが流布され、全ての労働者が「国民」として「国難」に立ち向かうために総動員され組織化されようとしている中で、労働者の団結と連帯で苦難に立ち向かい乗り越えるために、何が必要なかが問われた。私たちは、JR総連と共に、連合の仲間たちと共に、被災者支援の取り組みを展開してきた。労働組合としての組織力・団結力を最大限発揮してきたのだ。しかし、まだまだ、震災復興への道程は厳しい状況であり、更に奮闘しなければならない。

一方、東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故・放射能漏れ事故は、あらた

めて労働組合として原発をどのように捉えるべきなのかを突きつけられる事態となった。私たちJR東海労の仲間には、嘗て反戦・反核・反原発闘争を牽引してきた仲間たちが多く結集している。しかし、「夢のエネルギー」「安全でクリーンなエネルギー」という原発推進イデオロギーや、安全神話を前に、いつの間にか原発を容認し許してきたという現実もある。私たちは、福島第一原発事故を前にして、この反省から出発せざるを得なかった。その反省に踏まえ、反原発の立場を明確にし闘ってきた。様々な集会へも参加し市民団体・学者・知識人との交流もつくり出してきた。私たちは、つくり出してきた昨年闘いを継承し、更なる反原発の闘いを推し拡げるために奮闘する決意である。

昨年5月27日、国土交通省はJR東海に対し、正式にリニア中央新幹線の建設を指示した。JR東海の「構想」が、法律に基づき国家の意思に高められたのである。このことで、反リニアの闘いは新たな段階に入ったことになる。この間つくり出してきた、リニア中央新幹線建設反対のための闘いをより一層強化しなければならない。まさに真価が問われる一年となる。

ところで、JR東海は、自治体との調整が困難と見るや、中間駅の建設費を全額自己負担することを打ち出した。「反対の芽」を少しでも摘みつつ、まさに強引に突っ走っているのである。しかし、いずれにせよ現段階においても、安全性、経済・採算性、環境適合性など何ら問題点は解決していない。JR東海で働く私たちにとっては、今後の会社経営を左右する重大な問題であり、労働条件や雇用問題へと直結する極めて深刻な事態を突きつけられることになるのだ。労働組合のチェック機能を発揮しなければならない。

そのような中、JR東海は、昨年10月環境影響評価方法書を作成し関係する沿線住民への説明会を開催した。今、その説明会に参加した住民の怒りの声が大きく上がっている。「全く一方的で不誠実」「縦坑を掘るなんて聞いていない」「そもそもリニアとはどのようなもの」「大深度を通るから関係ないと思っていたがとんでもない」「説明になっていない」など、アリバイ的な説明会に怒りも持った沿線住民・市民が連絡会をつくり協議をはじめた。

2014年度の着工予定を前にして、この一年の闘いは、極めて重要なものとなる。したがって、私たちは、この間つくり出してきた連帯の輪を更に推し拡め、JR東海の傲慢な対応に怒りを持ち立ち上がった、沿線住民・市民など多くの仲間たちとリニア中央新幹線建設反対のための闘いを、より一層大きく広くつくり出していく決意である。

2012年は、厳しい政治・経済状況の中での幕開けとなった。復興財源確保、社会保障充実に名を借りた大衆収奪・増税がのし掛かろうとしている。武器輸出三原則を緩和し日本の軍需産業が世界を駆けめぐる。平和が脅かされようとしているのだ。まさに、私たち労働組合の任務が極めて重要なものとなることは間違いない。職場から当たり前の労働組合活動を展開し、そして、田城郁参議院議員と共に、私たちが先頭に立って困難を切り開き、この社会を変えるために断固闘っていくことを明らかにする。

この当たり前の労働組合活動を弾圧する攻撃は、一層激しくなることは明らかである。美世志会の仲間たちに対する不当弾圧・不当解雇攻撃として振り下ろされた攻撃がそうであるように、私たちが根絶やしにする攻撃が熾烈にかけられてくるであろう。しかし、私たちは怒りの矢を、最高裁判所要請行動、社会に広く連帯し訴える闘いを通じて、権力の咽元に突きつけている。えん罪JR浦和電区事件完全勝利に向けた闘いは正念場を迎える。私たちは、美世志会の仲間と共に、さらなる闘いを強化し、一切の弾圧を跳ね返していく。

怒りと喜びは闘いと共にある。職場の理不尽に対し怒りを持って闘う。そして、闘ったもののみが感じる喜びを全組合員で噛みしめる。全ての労働者の未来を切り開くために、私たちJR東海労は更に前進する。

以上、アピールする。

2012年1月15日  
JR東海労働組合